女性の葛藤と個性化に関する心理臨床的接近

―女性性を優先させたキャリアウーマンの母と対人関係障害の娘の事例―

東山弘子

I　問題と目的

フロイトによると、母親は「両性にとっての人生における最初にして最強の愛情対象(first and strongest love-object)であり、その関係は「その後のすべての愛情関係の原形（prototype of all later love-relations）となるもの」[1]であり、これは「生涯を通じて比類のない不変で独自の関係」である。小川捷之によれば、「フロイト派にあっては、多くの神経症者の治療が男根期のエディパルな問題の解決に終始し、それゆえ、現代のような母を巡るごく幼少期の自我形成上の問題は一般に等閑視されていたのではないかと思われる」[2]。

サリヴァンによると、乳児期、子どもがエンパシーによって絶対的安全感（オイフォリア）、弛緩、快を体験すると、その母親は「よい母親」(good-mother)として体験され、これがgood-meとしてセルフシステムに組み込まれるというのである。ところが、不安、緊張、不快を経験する場合は、それが「悪い母親」(bad-mother）となり、それによってbad-meが組織化されてゆくという[3]。

クラインは、人間が出生後はじめて経験する外的対象としての母親の乳房と子ども口唇的感覚を重視し、この時期、外界の対象（乳房）は一個の存在として認知されないと指摘し、乳房は「栄養の源泉となるものであり、それゆえに最も深い意味で生命そのものの源泉であって、人間精神にあってのあらゆる「よきもの」の起源となるものである」[4]としている。

エリクソンは、母子関係の相互性に基づく「基本的信頼」の確立とその喪失の結果としての「基本的不信」を生じる危機を指摘した[5]。

スピッツは、「少なくとも最も早い時期の子どもは受身的な受容者である。母親の人格の偏向はそれゆえ、子どもの障害に表現されることになると述べ、母子の不満足な関係はこどもに有害な精神的影響を発生させると主張した。「乳幼児と母親（あるいは母親の役割を演じる人物）との人間関係は親密かつ継続的で、しかも、両者が幸福感に満たされるような状態が精神衛生の根本であり、」「長期にわたる母性的養育の喪失は子どもの性格にまた子どもの全生涯に著しい影響を及ぼす」と結論している(6)。

ユング心理学の立場では「母親に投影された元型こそが母親に神話的な背景をあたえ、それによって母親に権威を、つまり、ヌミノースな性質を与えている」(7)と考えられている。

河合隼雄によると、母性の特徴は「包む」ことにあり、父性の特徴は「切る」ことにある。母性はすべてのものを平等に一体として扱い、父性はそれを分離しようとする。母性は「我が子はすべていい子」という考えに立って、すべての子を育てようとするのに対して、父性は「いい子が我が子」という規範にたって子どもを鍛えようとする。父性は弱いもの、努力しないものにたいして容赦ない切断の力をふるう。父性も母性も同じく肯定、否定の両面をもち、それは子どもを鍛えるというよい面をもつが反面、破壊し、のびる芽を摘み取ってしまう否定面を有している(8)。

馬場謙一によると、望ましい母親とは、①子どもとの接触によって、情愛を触発されるだけの感受性や感応力を具えていることであろう。これがないと、母子の双補的な関係が成立しないことになる。②そのようにして触発された情愛を、自然に表現する能力をもつことである。たいていの母親には、本能的にこの能力は具わっているが、母親自身の性格によって、あるいは母親の幼児期の親子関係によって、歪められた表現しかできなくなっている場合が多い(9)。

ところで母性には、代替不可能な母性と代替可能な母性がある。妊娠出産と人生初期に必要な母性は動物的で、土のにおいのするものである。あるタイプの母はこの本能的ともいうべき母性を発揮することができなかったり、発揮することを嫌う。べたべたした動物的な行為は、自分が動物レベルまで貶められる感覚が耐えられないのである。子どもの動物的要求はまったなしであるから母の「自己犠牲」的対応を要求されるが、これができない。

働く女性のなかには、子育てよりも仕事のほうが楽だと仕事を採り、他者に子育てを任せてしまう女性たちがいる。かっこいい新しい生き方を標榜しながら実は子どもの存在を見捨て、関係を切っているという「影」に気づいていない。この自分の「影」に気づくことはとても辛く、難しい課題である。幸か不幸か、子どもが思春期を迎えてそのことを症状や行動によっていやおうなく気づかせる事態が生じるようである。

現代においては実母や姑との同居によって子育てを全面的に任せる幸せを享受するキャリアウーマンはますます増える傾向にある。「ますおさん現象」といわれ、今日的家族の形態である。一家にふたりの主婦はいらないといわれるとおり、すべてを実母や姑に任せてしまえば心の負担は軽くなる。核家族化が進んでいくなかで、婚家とのつながりが切れて、自分だけの孤立した子育てを余儀なくされた妻たちは夫を唯一の相談相手としているが、それは夫には負担が大きく、不安も大きい。そこで夫をあてにせず、一度切れた実家との関係を再開し、母娘結合を復活させるケースが激増しているのである。こうして、子供を預けぱなしの仕事しかできない依存的娘と、孫の面倒をみることで母性的関係のなかに退行していく母の組み合わせができあがる。

本事例は、子育てのすべてを実母に任せ、娘的に生き、仕事のなかで自身の才能を発揮しようとした女性が、思春期の娘がおこした万引き事件を契機に母として娘とむきあい、「育てなおし」と「育ちなおし」を体験することによって母性を再生させた事例である。

II　事例の概要

（1）**主訴**：高校三年のE子が、掲示物をビリビリに破いて撒き散らしたり、教室の備品を壊したり、友だちのノートを抜きとるなどというトラブルを起こして、先生に注意されたが、本人は覚えがないと主張し、まったく悪びれた様子がない。ほかにも学内に盗難事件があり、生徒や先生からE子らしいと噂が出ており、退学処分の対象になるところだが、心理的な問題があるのではないか、と思われるので筆者に診断してほしいと依頼された。精神科のドクターの診断では、分裂病の疑いはあるが、おとなへの移行のプロセスに困難をきたし、混乱がこのようなかたちで出ているとのことであった。

（２）家族構成（面接開始時）

クライエント	40歳	公務員	大卒
夫	42歳	公務員	大卒
Ｅ子（当人）	17歳	高校生	
妹　Ａ子	15歳		
妹　Ｃ子	12歳		
母（クライエントの実母）	70歳		

（３）見立て　Ｅ子が「事件」のことを覚えていないことと臨床像から「対人関係障害」の娘と、その対応に苦慮する母親と見立て、両者それぞれの面接を筆者が施行することにした。

Ⅲ　面接過程

＜初回面接＞

Ｅ子と母（クライエント）が来談。はじめてＥ子とクライエントに会ったとき、二人は母子の雰囲気の湧かない他人同士といった印象だった。Ｅ子は大柄でおしゃれ気のないボーイッシュな人で、視線を落とした前こごみの姿勢でぼそぼそとしゃべる。しかし、クライエントは小柄で女性的でおしゃれな服装をして、芯の強さを秘めた人だった。

クライエントは、仕事中心のキャリアウーマンで、実母と暮らしているが、家事はすべて彼女に任せている。クライエントは、先生に言われてきたが、Ｅ子に問題はないと主張し、強い調子で学校に対する不信や先生の無理解を訴えた。学校の先生にＥ子の問題について話をされてもぴんとこないし、自分自身はまったく無関係であるという意識が強く、自分がクライエントという立場になることを拒否していた。

Ｅ子の方は、バッグを膝に乗せてファスナーを開けて、中のものをいじりながら、中学時代のいじめられた体験や家のことをマイペースで話し続ける。Ｅ子自身何のためにカウンセラーのところへ来たのかはっきりしていなかった。クライエントは、筆者の面接が学校の処分を決めるためのものでないことがわかり、ようやくカウンセリングに通うことを決める。しかし、最初は通常のカウンセリングではなくて、お昼を一緒にしながら話を聴いてほしい

と、カウンセリングの枠組みに入ることに抵抗した。カウンセラーが通常の枠組みを崩すなら会えないと主張すると、考えた後に了承する。

E子は、クラスの中で女の子たちとうまくいかないこと、自分には了解できないことがたくさん起きていること．学校の先生や両親との関係でも自分には了解できないことがいろいろあると訴える。たとえば、E子はノートを貸してほしいと頼まれると、すべて気持ちよく貸してあげるし、意地悪はしないけれど、自分がノートを貸してほしいと頼んでも貸してくれる人はいないし、しかたなく自分ひとりであれこれしていると変な目で見られる。特にB子は、私を困らせるように私のプリントをのぞいたり、ノートを貸してほしいと近づいてくる。先生に、B子に注意してくれるように頼んだが、私のほうが変に思われた。私ばかり先生に注意されるのはなぜなのか。わからない。先生が注意してくれないから、私は自分でB子に仕返しをした。B子のかばんからプリントとノートを抜き取ってやった。E子は当然のことをしたまでだ、とまったく悪びれたところがない。おそらく「事件」もE子のほうには、心の中での妥当性があったと思うが、一種の対人関係障害の問題を抱えている。幼いころから他者との関係や集団のルールを理解できないままみんなに合わせてやってきたのであろうが、ここにきてそれが破綻し、内的な欲求が直接的な行動となって集団のルールを超えて噴出してきたのであろう。

E子の面接は、学校側からドクターの診断が必要だといわれていたので、カウンセラーの信頼する精神科医に紹介したところ、E子はドクターを気に入り、彼の心理療法を受けることになった。

母との面接を週1回、K大学の相談室で、母の仕事を配慮して夕刻を選んで引き受けることとした。

(1) 第1期　娘の問題行動をうけいれるまで（＃1～＃10）

「こんな事態になるとは夢にも思っていなかった。E子は祖母に任せていたので、幼少時のことはまったく記憶がない。仕事から帰るとごちゃごちゃといってくる子だが、私はその話がきけない。E子は『センス』がないので私とは合わない。E子の行動パターンは、父親のそれと酷似している。幼いころは、異常なほど「お父さん子」で、二人はクライエントにとっては不思議な存在だったと、述懐する。クライエントは実母と同居する見返りとして、

家事、育児のすべてをしてもらっていたので、煩わされることなしに仕事を楽しめて幸せだった。だから、Ｅ子の対人関係の原型やルールは、主に父と祖母から得たものだ。父と祖母の関係は複雑で、お互いに抑圧的な関係だった。祖母が母親代わりで、クライエントはＥ子の母としては存在しなかった。ところが11歳で初潮がきて、Ｅ子にむすめらしさが出てきた頃から、父親の態度ががらりと変わる。たとえば、女の子らしい飾りのついたバッグを持っていると、それをいきなり庭に放り出したりした。父親は男３人兄弟で育った人なので、女の子が大人になるということがよくわからず、一種の接触障害を起こしたのかもしれない。それまでは父親っ子だっただけ、Ｅ子に大きな混乱を起こした。」

セラピストには以下のように思われた。すなわち、父親の論理の枠組みからは、この時期の女の子の人間関係の有り様は見えないし分からない。そこで父親が自分にしたのと同じパターンで、学校や友達に対してやっているのであろう。その上、彼女は父親の行動や行為の一つ一つを対象化できない段階にとどまっている。このような未熟さや幼さは、Ｅ子の素因と育てられ方の両方に関係していると思われる。どこまでいっても混乱するばかりで、女に生まれたことをどのように引き受けていいか分らない。Ｅ子は女の子が通る自然な発達段階を経てきていないので、この他にもいろいろな「わすれもの」があるようである。これがたくさんになると、知的防衛もあちこち綻びだす。ルールが分からないと大人になれないし、自分の中でも折り合いもつかないし、他者や社会との折り合いもつけられないだろう。

「夫はかなり変わった人で、生活に必要なもの――たとえば灰皿、自分の椅子等をいつも定位置にセットして置くことを要求する。定位置においておかないと、うろうろして落ち着かず烈火のごとくクライエントを叱責する。また、その定位置は誰も座れない占有場所になっている。感情の起伏が激しく、家庭では緘黙に近い状態でむっつりしているが、娘のしていることや妻の対応に気に入らないことがあると、発作的に殴るとか、大声でどなるなどといった激しい行動に出る。時には自分の枕をもって家を出てしまう。「おかしいでしょ、かわってるの。そこがわたしにはかわいくて味があるの」と微笑む。夜が更けて非現実の世界に沈潜してくると夫のこころの深みが歌になる。

彼には二面性があって、家では無口だが一歩玄関を出るその瞬間に面を付け替えたように人が変わり、愛想がよくなる。職場での夫は温厚な中間管理職として信頼されている。理解の域を超えているところがクライエントには不思議な魅力である。

E子の“事件”は、彼女の生育歴における人間関係に問題があり、現実世界の把握が困難なまま青年期にいたらざるをえなかったことに深く関わっていることが見えてくる。思春期以後夫の怒りがE子に向いているのは、二人がよく似たパーソナリティなので、自分の影を相手に見て衝突し攻撃しあうのではないかと思っている。

たとえば、父親がE子を学校へ車で送って行くつもりで、E子が出てくるのを外で待っているが、E子がそうとは知らずゆっくり出てくると、その日は突然「降りろ」といって、途中で降ろしてしまう。E子はなぜ父親がそうしたかがわからないので、夜、CDの音を大きくして父に抗議する。これに対抗して父親のほうもTVの音を大きくする。また、E子の部屋が片付いていないと、本やかばんを庭に放り投げてしまったりする。一切説明がないのでE子には不条理が起こっているとしか思えないのではないか。しかし、旅行のお土産に買ってきた真っ赤なポシェットをにこりともせずにE子に手渡したりする。E子の方もありがとうも言わずにそのあたりに放り出してポイッと置いたりする。

夫をクライエントは、不言実行型の頼もしい男らしいと言う。セラピストにはE子と父は似たタイプにように思われ、クライエントの夫イメージには違和感が感じられる。そして、クライエントの男性観と父親の女性観のゆがみがあるように思われる。

＜二人は似ているのに、クライエントは夫に対してはポジティブであって、E子にはネガティブなのはなぜなのだろうか。＞

（2）第2期　E子のそだてなおし（＃11～＃18）

クライエントはセラピーに意味を見出し、自分の課題はE子の育て直しと、自分探しだ、という。最近、短歌が作れなくなっていたが、セラピストとの面接を重ねていけば自分が見えてきそうだと思うのでがんばりたい。実母が

見ていてくれたため、クライエントにはＥ子の幼いころの記憶がほとんどない。べたべたした動物的な子どもとの関りは嫌悪感しかない。それは自分が動物レベルまで貶められる感じがするからである。当然の事に授乳もしていない。娘との出来事で思い出すのは11歳だった。それは風呂場で恥毛を剃っているＥ子を目撃したときだった。

セラピーでＥ子の17年間を振り返ることは、クライエントにとって抵抗がある苦しい仕事だった。Ｅ子に対する腹立たしさやわずらわしさ、避けたい気持ちなどが錯綜していたが、だんだん自分の問題として引き受けるようになっていった。家庭が抱えている問題や夫との関係、これからの人生を考えていくようになる。Ｅ子がワイルドな世界を抑圧的に抱え込んだまま17歳になっていたことに対する痛みが、クライエントの涙とともに語られるようになる。

マスコミで「ますおさん現象」といわれているが、クライエントも、働くことに幸せを感じ、子育ても母親との関係の中で通りすぎていき、母としてのイニシエーションを経ずに娘のままに生きてきたのである。「Ｅ子としっかり付き合っていくうちに、夫との間でわだかまっていたものが、月の裏側を見るように見えてきた。魅力であったはずの夫の無口さや個性がそうではなくなってきた。なぜ自分が娘を受け入れにくいのか、娘を遠い存在にしてできるだけかかわらない形で大人になってもらいたいと思うのかを問いつづけていたら、夫のわかりにくさや夫との距離の遠さを、実はうらんでいたり、さびしく思っていたり、嫌っている自分がいたこと、自分と夫との絆がまったく切れて背中合わせになっていることなどが見えてきた。自分たち夫婦は今も男と女の関係で生きているが、父や母としては生きていない。

これはクライエントにとっては辛い洞察だった。少女のように元気だったクライエントは、うつ的になり、仕事を休んだり、味覚がなくなったり、声が出なくなってしまう。クライエントとＥ子の関係の修復は、Ｅ子がクライエントにクラスメートから抜き取ったノートやプリント、万引きした小さなかわいい縫いぐるみなどをクライエントに見せたときから始まる。Ｅ子が「わたしはノートを貸してほしいと頼まれると気持ちよく貸し、断ったことがない。しかし、わたしがノートを貸してほしいというと誰もが断る。とくにＢ子はしつこくわたしのプリントを覗き込んだり、ノートを貸してほしいとし

つこく迫る。先生にB子に注意してほしいと頼んだらわたしのほうが変な目で見られた。わたしばかりが注意されるのはなぜなのか。わからない。先生が注意してくれないからわたしは自分でB子に仕返しをしたのだ。Bのかばんからノートとプリントを抜き取ってやった。当然のことをしたまでだ」と、まったく悪びれたところがない。しかし、そのことを打ち明けられたクライエントにとっては、「青天の霹靂」で、しばらくは言葉がでなかった。E子と母の間には、万引きについての受け止め方に大きな違いがある。E子にとってモノは貸し借り自由なもので、もともと誰の所有といった感覚はないのではないかと思われる。ようやく「母」を始めたお母さんに、痛々しいくらい無心に自分の世界や気持ちを、他人から“借りている”そのモノを通して語っているのかもしれない。結局クライエントはE子が万引きした品物を預かり続けることにする。それはクライエントがそれを持ち続けている間、E子の罪とジレンマを共有し、このことから逃げないという意味の確認だった。クライエントが母として娘にかかわる儀式だった。

しかし、実際に娘を抱えていくことは難しく、娘から逃げたい思いが強く、学校での問題に関しては、カウンセラーと先生に依存的になり、「先生がなんとかしてほしい」といい、両親ともに蚊帳の外にいようとしがちだった。E子の学校での様子は変わらず、トラブルを次々と引き起こす。その一つはE子の学校の象徴ともいうべき神聖な品物を破壊したことである。これは他の生徒への影響が多いので、退学を迫られるという事態が起こる。このようになっても、クラスメートはカウンセラーに依存的で、「学校の先生がおおげさに言ってるだけ」「学校で起こったことに親は関係ない」など、状況把握が甘いので、カウンセラーは意を決して、「クライエントが協力的でないとこれ以上セラピィを引き受けることができないこと、学校に対しては親としては言い分があるだろうが、今はE子を優先させることが大切なのではないか」と、クライエントに迫った。クライエントは、恥ずかしいので学校へ行きたくないこと、父親が行くべきであること、カウンセラーに何とかしてほしいと、延々と訴えた。カウンセラーは「先生の言われることを黙って聞き、そのまま袋に詰めて自分のところへもって帰って来る気持ちで行けばいい。これは『お参り』なのだ」と言ったら、ずいぶん我慢して学校へ行ったようであった。学校からの帰り道で、「情けなくなって泣けて泣けてしかたがなかっ

た。気がついたら一時間街をうろついていた」という。

それがクライエントのターニング・ポイントとなり、それからクライエントはＥ子と一緒に風呂に入り、一緒に寝るようになる。Ｅ子は体がとても硬く肩が異常に凝ることを発見し、寝る前にクライエントがマッサージしてやるようになる。母とＥ子の関係が深まっていたころに、CDの音が大きすぎることがきっかけで父親がＥ子の部屋に飛び込んで殴りかかりそうになるという事件が起こった。いち早く気づいたクライエントがＥ子の前に立ちはだかって『Ｅ子の代わりに私を殴って』と叫んだので夫は上げた手を下ろして静かに立ち去った。こんな場合、今までだったらクライエントは傍観者であったけれども、今回はじめてＥ子のお母さんができた」と感慨深い様子だった。これはＥ子にとっても「お母さんが私を守ってくれた」と実感できたはじめての体験となった。父親にしても、はじめて妻が自分に対峙して来た体験であった。

（３）第３期　Ｅ子の不登校と母の自分探し（＃19～＃35）

Ｅ子はその後も学校では相変わらずトラブルを起こし、学校側からセラピストに退学を進めてほしいとの依頼が来る。事態が深刻なようすなので、いちど面接を薦める。来談したＥ子は「学校にいきたくないが卒業したいから無理していっている」という。卒業にさしつかえないこと、大学に行ってからやり直しが効くということを確認するとほっとしたようで、不登校できるようになった。ケーキ作りに凝り、進学のための勉強をするようになる。何か困ったことがあるとクライエントの仕事場へ電話してもよいことになった。些細なことで電話をかけ、母親のケアを楽しむようになる。今では外との緊張関係にエネルギーが分散されていたが、この五月雨的不登校によって家の中が自然にまとまってくる。母親との関係が密接になってくると、Ｅ子はポツリとおばあちゃんは私を叱ってばかりで怖かった、ともらす。クライエントは、「実母からＥ子はいい子だった」という報告を毎日受けているので、Ｅ子と祖母がもめていたのに気づかなかった。母が家庭の揉め事が嫌いで聞きたくないことを知っていたので、Ｅ子も祖母も母の耳に入れていなかったのだ。そして、自分が娘時代に母親とことごとくもめて、大学に入ったのを機に自立したことを思い出す。Ｅ子と祖母がうまくいくはずがないとわかっ

ていたのに、母親に任せてしまったことを後悔する。同時に、母親に任せたことに、自分は母親に大事に育てられなかった怨みを、母親に娘を育てさせることで代償させたい想いがあったことに気づく。実母は再婚で、クライエント以外の家族に気を使って、自分はいつもあとまわしにされていたことを恨んでいたと告白した。

E子を自分で育てなかったことを悔みはじめると、クライエントには母親が煩わしくなってきた。そして母親（E子の祖母）のE子に対する今までの冷たい対応を責めるようになった。E子の肩を持つ発言を機に母親はクライエントと激しく喧嘩をして、「わたしは望んでここに住んだわけではない。（クライエントの）言いなりになりたくない」と言い残して、クライエントの妹のところへ行ってしまった。

（4）第4期　家族関係の変容と再生（#36～#45）

こうして母、クライエント、E子の三代にわたる「女の葛藤」が表面化した。E子には二人の母が居たわけで、このことはクライエントが自分の娘性についての考えを整理するきっかけとなる。姉妹の事、おばやいとこのこと、なぜ母を引き取ったのかなど、クライエントは自分のことを整理し始めた。実家の雰囲気が重苦しかったこともあり、大学を出ると、家を出てすぐに結婚した。結婚も自分の都合でしたとの意味が見えてくる。

家族関係が変化していく中で、少しずつ生の感情が家族の中に流れ始め、夫婦関係にも変化が見られるようになる。クライエントは、夫が職場でどれほどつらい立場にあるかを少しずつ聞き取れるようになったし、理解を示す言葉も出るようになってきた。自分が感動した本をさりげなくテーブルに置いておくと、それがなくなっていて夫が読んでいることがわかる。夫のほうから職場での助言をクライエントに求めるとか、部下を家に連れてくるようにもなった。これまで夫は母やクライエントに対して向けるべき感情をE子に向けていたが、それをクライエントに向けるようになった時点で、クライエントの声が出るようになり、味覚も回復した。

クライエントの症状が回復してくると、今度は夫のほうに問題が起こる。夫が自動車の追突事故にあって倒れる。連絡をうけたクライエントは飛んでかけつけた。まだ救急車が来ておらず、道路わきに横たわっていた夫をかい

がいしく介抱すると、夫が「お前がいてくれるだけでいい」と耳元でささやく。クライエントは、これからも二人で生きていこうという意志を確認できた。「再婚」の儀式だと感激する。これは子どもが独立した後につながっていく大切な関係の基礎になり、父と母が連合して子どもに接する条件ができたことになった。

Ｅ子は、浪人した後大学へ進学する。そのころからお化粧をし、おしゃれも身についてきてカウンセラーが見間違えるような生き生きとした娘さんになる。終結のときクラエントは家の歴史を振り返って、わが家には、自殺したり、夭折した人があったり、他にもさまざまなことがあった家だが、そういう生きられなかった人の命のおかげで、私たちは生きられている。そう思うと、私たち一人一人の命は重いですね、といった。しばらくしてクライエントの新刊の著書がセラピストのもとに届けられた。

Ⅳ　考　察

（１）「母性」機能の要件

母性の機能のひとつは「自己犠牲性」である。子どもの対しては何の恩をきせずに、ごくあたりまえの自然発生的な感情の発露として子どもの欲求に応じることができることである。とくに生後まもない子どもは、こちらの都合はお構いなしに自分の欲求をつきつけてくる、扱いかねることの多いそんざいであるが、それでもこちらの都合を犠牲にしてあわせていけるのは子どもが反応してくれるからである．お互いに相手を求め、メッセージを受け止めあって満足する喜びは何にも代えがたいものである。つまり、自分の都合や事情よりも子どもの都合を優先させて、恩に着せずにこどもの欲求を満たすという自己犠牲性を中核に置く。思春期に子どもにたいして育てた苦労を話し、恩にきせる親にたいして、子どもにできる対抗手段はせいぜい「うんでくれなければよかった」「頼んだわけではない」「生まれてこなければよかったんだ」とさけぶぐらいのことであろう。親の苦労や自己犠牲的努力についてはわからせるものではなく、親の態度から子どもが感じ取るものである。もし子どもに親の苦労を話したくなった時は、親が人生に疲れたときであり、親自身の人生に対する失望が隠されている。親がこどもに自己犠牲を伝える

と子どもを自己否定に陥らせることになり、人生そのものに失望を感じさせることになる。

二つ目は「こども主導性」である。子どもは自分の欲求をいろいろなサインでたくみに表す。赤ちゃんは泣くことで自分の欲求を知らせるので、親はそれを直感的に読み取って応じていけばいいのだが、最近この読み取りがうまくできない母親（親）が増えている。親の事情が優先されて、親がサインを出し子が従う方が親には楽である。動物の子育てをみてもわかるように、子どもは親のサインに従順であるので、これを使い出すとどうしても親主導になり、子どもの欲求が無視されることになる。動物は、よほどの危険が迫っている場合以外は親がサインを出すことはまれで、多くの場合、子どもの出すサインに親が従っている。言葉を使用する人間は、複雑なサインを親主導で出す動物である.それが昂じてくると子どもの心底の欲求が無視され、A子や次男の場合のような深刻なレベルにいたることになる場合があるのである。

その3は「癒す機能」である。人は誰でも、元気な時は社会的に外に向かってがんばれるが、躓いたり、挫折したり、疲れた時には、心を癒してくれる人や時間、空間が必要になる。ほっこりと温められ、エネルギーがチャージされて元気になるような、そういうものが「母」の機能である。

（2）「献身する」ことのできない母の病理

クライエントは、どろどろした関係の渦巻く実家を嫌い、大学受験を機に家を出た。動物的な母子関係を軽蔑し、生活レベルのもろもろを自分から切り離していきようとする、代替不可能な母性を否定する女性であった。授乳やべたべたした関係は自分が動物的レベルに堕落させられる思いでぞっとすると語るクライエントは、それを実母に担わせようとしたと思われる。母が義理の姉たちに気遣うあまり、クライエントと妹は母から十分な母性的養育を受けられかったこと、妹が思春期に自殺したことなどの体験が、生の感情を切り離して生きることになったのであろう。歌を詠み、べたべたしない大人の「粋な関係」をめざすクライエントは、身体感覚や感情との乖離が生じていたのである。

E子との関係修復が、背中を掻く、いっしょに寝るなどのスキンシップの

かたちですすんだこと、母親的になっていくプロセスで味とにおいを失うという、原始的感覚に症状が出たことは、意味深い。

（３）実母との結合関係の終焉　娘から母へ

クライエントは、夫の振る舞いを「個性」と評価し、娘に対する突然の行為もとがめていなかった。しかし、娘にとっては理解の域を超え、母の守りを必要としていた。そのことがわかり始めて、クライエントの母親としての感情や行動がではじめると、夫に対する直接的な行動や攻撃的感情が出てくる。これは夫には不可解であり、娘には守られている感情が満たされていくという、母娘の関係と夫婦の関係の拮抗的関係の不思議さを感じさせるものであった。

しかし、実母との関係はうまくいかなくなった。クライエントの母娘結合は、実母が家を出るという行動によって決裂に至った。これはクライエントの実母からの自立であり、クライエントが母となっていくターニングポイントであった。

実母と夫の関係もよくなかったことがすこしずつ解き明かされ、夫にたいする気持ちも変化する。まったくそのことを無視してきたことを申し訳なく思い、夫が男兄弟のなかで、父のスパルタ式教育を受けて育ったこともうけとめ、ふたりの娘の思春期は母である自分が引き受ける決意をした時点で、母娘関係は安定していった。

※プライバシー保持のため、事例の内容に関しては一部変更されています。

【引用文献】

（１）フロイト, S.　(1954)『自我論』　日本教文社
（２）小川捷之他 編　(1984)『母親の深層』　有斐閣
（３）サリヴァン, H. S.　(1976)『現代精神医学の概念』(中井久夫他 訳)　みすず書房
（４）クライン, M.　(1975)『羨望と感謝』　みすず書房
（５）エリクソン, E. H.　(1973)『アイデンティティ』　金沢文庫
（６）スピッツ, R. A.　(1965)『母子関係の成りたち』　同文書院

(7) ユング, E. G.　(1982)　『元型論』　紀伊国屋書店
(8) 河合隼雄　(1976)　『母性社会日本の病理』　培風館
(9) 飯田真也 編　(1983)　『精神の科学 —第7巻— 家族』　岩波書店

【参考文献】

1. 河合隼雄　(1976)　『母性社会日本の病理』　培風館
2. ドイッチェ, H.　(1964)　『若い女性の心理』　日本教文社
3. ノイマン, E.　(1980)　『女性の深層』　紀伊国屋書店
4. バダンテール, E.　(1991)　『母性という神話』　筑摩書房